

岐阜県農業技術センターニュース No.30

2020清流の国ブランド開発プロジェクト研究

(野菜・果樹部、花き部、作物部)

東京オリンピック(2020年)に向けて、岐阜県産業の魅力・強みを活かした新商品や高付加価値化、本県育成の新品種によるブランド農産物の開発を、外部機関とも連携して研究を行います。

(1) 県育成新品種を核とした「サクサク柿」の安定生産と新商品開発

消費者に好評なサクサクとした食感を持つカキ「太秋」及び県育成新品種(平成27年2月出願)等を用いて、

- ①貯蔵技術の確立による供給期間の延長
- ②世界最高レベルの糖度を有する県育成新品種を用いたブランド柿
- ③雄花の両性花誘導技術開発による小型果実の大量生産・スナック感覚ブランド柿
- ④600gを超える超大型果実の生産技術開発によるブランド柿

これらの商品開発によって、一層の国内販売、お歳暮や海外輸出を進め、カキの消費拡大を図ります。



世界最高水準糖度
保証県育成新品種

お歳暮・海外輸
出用「太秋」

スナック感覚小型
「太秋両性果」

1個売り超巨大
果実「太天」

(2) 新品種・マーケティング戦略を活かした「岐阜いちご」ブランドの再構築

イチゴ新品種候補「19-2-1」は、大果・果形良好・ツヤがあり、ジューシーで甘い等、優れた特長を持ち、これまで「濃姫」、「美濃娘」が築いてきた「岐阜いちご」ブランドをさらに向上させる品種として期待されます。

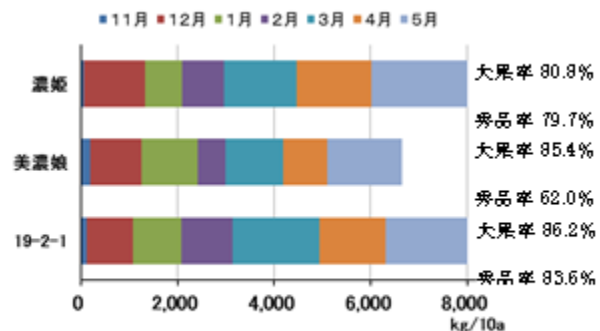
新品種については、安定生産技術の確立に併せて、新たな商品開発、販売方法が重要です。

これらに関する研究開発を行い、「岐阜いちご」のブランド力向上、生産、販売の拡大を目指します。



新品種候補「19-2-1」

の大果果実(85g)



3品種の時期別収量の比較(2014年作 高設栽培)

(3) 「ぎふ」をアピールできる輸出向け新花き品目の育成

日本の花き生産額は世界3位、新品種開発数は世界1位ですが、輸出は進んでおらず、海外での知名度も低い状況です。国では、花き生産の拡大促進に向け、新たな販路「花きの輸出戦略」を策定し、平成32年度に輸出額150億円を目標にしています。

県内生産者も「輸出拡大協議会」に参加し、積極的に取り組みを進めています。

当センターでは、海外への販路の創出や拡大とともに、国内産地・花き産業の一層の活性化のため、輸送性・国際競争力に優れた新しい花き品目の育成と輸送技術の開発を目指しています。

輸出に向く新しい花き品目の育成



Sedum



Eryngium



Campanula

(4) 米粉に向く品種「岐系205号」の安定多収をめざして

「岐系205号」は一般の主食用米に比べると、米粉にする際の製粉特性が良い極早生新系統です。

この米粉でパンを作ると、ふっくらとしたパンができます。

この新系統は、肥料が多いと倒れる心配もあり、栽培方法について、田植えの時期や施肥量等の検討を行っています。

当センター内では、間もなく収穫を迎えようとしています。

米粉を加工して、どんな美味しいパンなどの商品ができるでしょうか…。民間企業と共同開発をしています。



「岐系205号」の米粉はふっくら膨らみます(右)



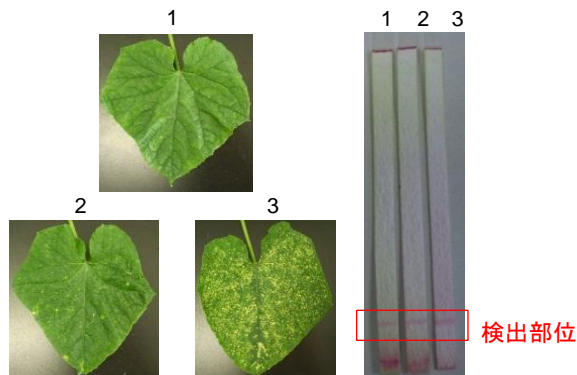
あきたこまち 岐系205号

果菜類の迅速なウイルス病診断技術の開発(生物機能研究部)

ウイルスによる病害は、キュウリ、トマト、甘長ピーマンなど様々な品目で発生し、さらには、複数のウイルス病が確認され、大変な減収となっています。

ウイルスに感染した植物は薬剤によって治りません。そのため、早期に罹病株を圃場から持ち出し、廃棄する必要がありますが、他の病原菌による罹病株や生理障害株との区別が困難で、処理が遅れ被害が拡大しています。

当センターでは、迅速かつ簡易でコストの低い手法を用いて、圃場で診断できる技術(迅速免疫ろ紙検定法)を開発し、農産物の安定生産に繋げていきます。



MYSV感染キュウリ葉と検定ろ紙を用いた検出